

障がいのある人もない人も/ 「共に生きる」

問 障がい福祉課 回 924-3838 FAX 922-4900

毎年12月3日から9日は「障害者週間」です。今回の特集では、障がいのあるなしに関わらず、誰もが安心して暮らせる社会を実現するために、市内で行われているさまざまな活動や取り組みを紹介します。



「障害者週間」は、障がい者を取り巻く就業や教育、生活環境などの日常的な問題について、関心や理解を深めるための週間です。

活動 1

八尾市障害者 団体連合会



通称の「八障連」は、「はっしょうれん」と読みます!

「共に生きて当たり前」をめざして

市内4つの障がい者団体で構成される「八尾市障害者団体連合会(通称 八障連)」。設立から26年にわたる活動について、現会長・音田二郎さん、前会長・渡邊節子さん、事務局長・木村滋さんにお話を伺いました。

——最初に、設立の経緯や理念について、教えてください。

渡邊さん 私たちの活動は、障がい者も「共に生きて当たり前」の精神が市民みんなに広がり、優しい手が差し伸べられることを願うものです。そのため、4つの障がい者団体が一致団結して、啓発を始めました。

——26年の活動の中で、社会の変化を感じておられますか?

渡邊さん 一番の変化は、私たち障がい者が歩いていると、「一緒に歩きましょうか」「青になったら一緒に渡りましょう」など、声を掛けてくれるようになったことです。

——以前は、そのようなことはありませんでしたか?

渡邊さん それまでは、いわば傍観者ですね。障がい者に対して、自分たちの世界とは違うという意識があったと思

います。でも徐々に、障がい者も一緒に生活して当たり前という意識が根付いてきたように思います。

——長年の活動が実を結びつつあると。音田さん そうですね、障がい者理解が進んでいることを実感しています。ただ、各団体とも高齢化が進んでいるので、担い手不足がこれからの課題です。

クイズやおQ

八尾市障がい者基本計画ワーキング会議の愛称は、何というでしょう?

ヒントはP4、答えはP5をチェック!



4代目会長の
渡邊節子さん



現会長の
音田二郎さん



事務局長の
木村滋さん



「災害時における障がい者理解・支援講習会」の様子

— 具体的には、どのような活動をされていますか？

木村さん 理事会や勉強会のほか、各団体同士の交流会も実施しています。啓発活動としては、毎年12月の障害者週間の初日にあたる3日に、近鉄八尾駅を中心に啓発物品の配布や市役所までの行進などの街頭啓発を行っており、今年も実施する予定です。また、各地域の協力を得て実施している「災害時における障がい者理解・支援講習会」にも力を入れています。

渡邊さん 災害時、障がい者はその地域に住んでおられる皆さんの助けをお借りして、避難しなければなりません。そのときのために、車椅子の押し

方や視覚障がい者の手引きの方法などについて講習会でお伝えしています。でも、目的はそれだけではないんです。

— 講習会の目的が、他にあるということですか？

渡邊さん 真の目的は、地域の人に近くどんな障がい者が住んでいるかを認識してもらうことです。あそこ的人是は目が不自由なんやな、あの家には足が悪い人がいるんやなと知ってもらって、災害時だけでなく、思いやりを持って一緒に生活してほしいという思いがあります。

— 近くに障がいのある人が住んでいることを知ってもらう機会にもなるんですね。



毎年12月3日には街頭啓発活動を実施

障がいのある人の相談窓口はP16に掲載しています！

八尾市障害者団体連合会

設立:

平成11年11月25日

構成団体:

八尾市身体障害者福祉会

八尾市視覚障がい者福祉協会

八尾市聾者福祉会

八尾市障がい児者問題協議会



八尾市障害者団体連合会

渡邊さん 他人と関わりたくない、関わってほしくないという今の世の中に逆らうようですが、そこを何とか関わってほしいと思っています。

— これから力を入れていきたいことを教えてください。

渡邊さん 障がいの種類によってめざすものも違いますから、発足当初は4団体の足並みをそろえるのに苦労しました。でも今は、みんなと一緒にやろうという雰囲気が出てきています。心をひとつにして、活動を続けていってほしいと思います。

木村さん 健常者と障がい者という言葉もなくなるくらいに、1人の人間としてみんなが一緒に暮らせる社会が理想です。誰もが分け隔てなく暮らせる社会を実現するために、これからもさまざまな活動をしていきたいと考えています。

「合理的配慮の提供」が義務化されました

「障害者差別解消法」が改正され、民間事業者による障がいのある人への合理的配慮の提供が義務化されました。合理的配慮とは、障がいのある人から「社会的なバリアを取り除いてほしい」という意思が示された場合に、負担が重すぎない範囲で対応することをいいます。



詳細は内閣府のホームページで見られます！



音田さん 今は真ん中に健常者がいて、その外側に障がい者がいる状況ですが、それが一緒くたになった包摂的な社会が本来あるべき姿だと思っています。障がい者の社会参加という言葉があります。社会そのものが我々を受け入れてくれないといけない。簡単にはいかないと思いますが、そのために、私たちは努力していかなければならないと思います。



「くれよん組」って？

くれよん組とは、「八尾市障がい者基本計画ワーキング会議」の愛称。障がい当事者や支援者などが、八尾市障がい者基本計画の評価や、自らも取り組みを行い、計画の実現を図るため会議を行っています。平成14年度からスタートし、毎年テーマを決めた「障がい者フォーラム」も実施。さまざまな障がいのある人が意見を出し合い、協力しながら、共生社会の実現に向けて活動しています。



参加のきっかけやこれから取り組みたいこと…などなど 会議メンバーに聞いてみました！



八尾市障がい者基本計画ワーキング会議の詳細は、市ホームページでご覧いただけます



視覚障がいのある渡邊宏さんは昨年は広く「障がい者フォーラム」の宣伝告知を担当。「私たちの境遇を良くするだけでなく、私たちを支えてくれる人たちの立場や処遇の向上についても考えたい」と今後の展望を話されました。

脳炎の後遺症による高次脳機能障がいがある五十嵐さんは、「障がい者や高齢者など働きたい人が仕事に就けない状況を改善したい」と会議に参加。「物理的なバリアフリーだけでなく、気付きにくい障がいをどうフォローするか」に関心があると語ります。

精神障がいがある渡邊小巻さんは、介護職に就いていた経験から、障がい者雇用に対する理解を深め

たいと参加。「病気のことを理解してもらって、障がいのある人もない人も共に暮らせる社会になったらいいと思います」。

病気による中途障がいで車椅子生活になった柏原さんは、フォーラムのロゴやチラシなどのデザインを担当。「障がいがあってもさまざまなことに関わって、この会議なら役所の人とも気軽に意見を交わせます」と語り、現在は災害時の避難に関心を寄せています。

「さまざまな障がいがある人と友達になれてうれしい」と笑顔で語るのは、聴覚障がい者の栗飯原さん。「私は耳が聞こえないのでコミュニケーションが難しいと思いますが、ここでは皆さんすごく協力的で。いろいろな人との交流が楽しいです」。

視覚障がい者になって約40年という田原さんは、「ここに参加して知らなかったことをたくさん勉強できました」と言い、「子どもたちに、障がい者や高齢者に対する思いやりを持ってもらえたら」と、小・中学校への啓発活動も行っています。



後列左端から渡邊宏さん、五十嵐さん、渡邊小巻さん、
前列左端から田原さん、栗飯原さん、柏原さん。



表紙モデルの高津さんも、20年以上にわたって活動するメンバー。「支援してもらっただけではなく、障がいのある当事者自らが動けるのがこの会議の魅力。放置自転車ゼロをめざす『ちゃりんこパスターズ』では、着ぐるみを着て街頭に立ったこともあります」

令和6年度「障がい者フォーラム」の出演者を大募集！

令和7年2月22日(土)に開催予定の障がい者フォーラムで実施する、「障がい者の主張」の出演者を募集します。このコーナーは、障がいのある人の日ごろの思いや活動を発表する場です。活動紹介や講演、ダンス、演奏など、レセプションホール(文化会館5階)で実施できるものであれば発表形式は自由！この機会にぜひ、主張を発表してください。

受付期間：12月16日(月)まで

応募方法：Eメール可(応募多数時は抽選)

障がい者フォーラムの詳細はこちらから！



舞台上の思いの丈をぶつけてみませんか？たくさんのご応募をお待ちしています！



今考える「親なきあと」

「親なきあと」とは、親から日常的な支援を受けて暮らしてきた障がいのある人が、親の加齢や死によって、生活上のさまざまな課題に直面することをいいます。本市では、保護者などが「親なきあと」の支援を考え、準備を進める契機となるよう『想いをつなぐノート』を作成しています。将来的な支援について、「親あるうち」から考えてみませんか？



八尾市独自の『想いをつなぐノート』『やおっこファイル』をご活用ください！

「想いをつなぐノート」の詳細は市ホームページからご覧いただけます。



18歳未満で障がいのあるお子さん向けの「やおっこファイル」もあります。



いつかの備えは、親が元気なうちから。

『想いをつなぐノート』を監修された、(一社)親なきあと相談室 関西ネットワーク代表理事の藤井奈緒さんにインタビュー！本市在住で障がいのある子を持つお母さんでもある藤井さんに「親なきあと」の活動やノートに込めた思いなどについて、お話を伺いました。



親の役割を、少しずつ誰かに託していく

私には娘が2人いて、長女には重度の知的障がいがあります。私がいなくなった後、次女一人に長女の世話を引き受けさせてはいけないと思い、将来に備えて勉強を始めたのが活動のきっかけです。私は終活カウンセラーでもあるので、長女の親なきあとへの備えは、イコール自分の終活でもありました。

その経験で得た情報を共有するために、仲間と立ち上げたのが「親なきあと相談室」です。税理士や行政書士など専門知識を持つメンバーがさまざまな相談をお受けするとともに、定期的に講演会も行っています。私は講演でお金の残し方について、お子さんのためにいくら貯めるかよりも、そのお金を誰にどう管理してもらうかが重要だというお話をします。お金があれば安心と思いがちですが、大切なのは残し方。毎日世話をしていると意外と気付かないこういったことについて、分かりやすくお話ししています。

この活動を始めてから「何かあったときに相談できるのが心強い」というお声をいただくことがあります。とてもありがたいのですが、なるべく何もないうちに、親の役割を誰かに託してほしいと



というのが私たちの想いです。親御さんが亡くなっていきなり他人のお世話になるのはお子さんの負担も大きいので、元気なうちから少しずつ支援者さんと共に暮らす環境を整えるのが良いと思います。



藤井さん自身の体験も反映した「想いをつなぐノート」

子ども自身の「幸せ」を考えるきっかけに

『想いをつなぐノート』は、子どもの情報を支援者さんにつなぐためのものです。私が意識したのは、親だけでなく、本人を知るさまざまな立場の人にも書いてもらうこと。本人が親なきあとに生きていく姿は、親以外の人に見せている姿に近いのではないかと思います。ですから、それぞれが知っているその子の姿を共有する項目を設けました。

また、家族の願いとは別に、本人の願いを書く項目も作っています。私も自覚がありますが、親は子どものことを全て分かっているつもりになりがちです。私の娘は言葉を話せませんが、それでも「この子は何を願っているのだろう？」と考えることはとても大切。本人が望むことは何か、どんな暮らしをしたいのか、このノートがそのことを考えるきっかけになればと思います。



「何かあってから」ではなく、何もないうちから備えを始めましょう！

クイズやおQの答え

正解は「くれよん組」。平成19年度にこれまでの会議の振り返りと、今後の会議の在り方についての話し合いが行われた際、八尾市障がい者基本計画ワーキング会議の愛称が「くれよん組」と名付けられました。

「親なきあと」に関するご相談は、
市役所本館1階 障がい福祉課
基幹相談支援センターでも受け付けます
☎924-3838 FAX922-4900